

# ファンにやさしい 馬学講座

第 4 回

本来は  
野生の動物なのに、  
なぜ馬は人と  
仲良く暮らせるのか？



今月の講師

楠瀬良さん  
(日本競蹄師会特別参与/  
前JRA競走馬総合  
研究所次長)



案内人：辻谷秋人  
text by Akihito Tsujiya

## 馬は仲間と群れで暮らす動物

前回、馬が人の顔を認識しているかどうかの実験を紹介した。スクリーンに人の顔を映し出し、知っている人と知らない人とで、馬がその顔を見る時間が変わるのか、という実験だ。

その結果、知っている人と知らない人との違いはあまりなかった。馬たちが興味を持った(長い間見つめていた)のは、動物であればやはり馬。風景だと厩舎だった。楠瀬さんによれば、「厩舎をよく見ていたのは、おそらく馬を探していたのだでしょう」とのことだった。

もともと馬は群れを作って暮らす動物であって、これはある意味で当然だといえる。彼らにとって、一緒に過ごす仲間は何より大切なものだからだ。彼らは常に仲間の馬を求めているのだろう。

しかし、そう考えると、馬たちが野生とはまったく違う状態で、人間と一緒に、しかも極めて良好な関係を維持しながら暮らしていることに、驚かざるをえない。いったいどうして、そんなことができているのだろうか。

## 人しか頼れなければ、人に頼るようになる

人と馬がともに生きるために、必要なことがある。馬たちに人の存在に慣れさせ、その指示に従うようにすること、つまり馴致である。

馴致は通常、生産牧場で行われるが、オーストラリアやニュージーランドは、生産牧場が何事につけ「おおらか」であることで知られる。かの国々の牧場では、馬たちは基本的に放置され、仔馬が生まれたことすら、しばらく気づかれないことも珍しくないという。

一かの国の仔馬たちは、生後3カ月くらい経っても人と接したことがない、なんていうのが当たり前だそうです」

それでも6カ月もすれば離乳をすることになる。しかし、そのやり方というのがまたワイルドで、仔馬だけを馬房に閉じ込めるのだ、と楠瀬さんは言う。そして、そこに人間が入っていく。「頼るのが人しかいない、という状況を作るんです。強引なやり方なんです。しかしこれで仔馬の人に対する社会化が急速に進みますね。人に触られても大丈夫になります」

しかし、これで本当にオーストラリア産馬やニュージーランド産馬の馴致がうまくいっているのが気になった楠瀬さんは、何人かの騎手に聞いてみたのだ。ハミ受けがやや硬いという印象を持つ騎手はいたものの、人への従順さなどで、他国産馬との違いを感じたことはない、というのが多くの答えだった。

## 馬は大人になつてからでも人に馴れることができる

日本では、そして欧米でも、馴致は慎重に行われる。生まれた直後から人と接する機会を多くして、徐々に馴らしていく。馬への負担を考えれば、それがいいのかもしれない。が、オーストラリア、ニュージーランド流の「離乳時に一気に」というやり方も、強引ではあるが成立するのだ。

馬語を解し、馬を決して傷つけず痛みも与えずに調教するトレーナーとして知られるモンステイ・ロバーツ。彼の父は、野生馬のムスタングを捕らえて乗馬にするのを生業にしていた。

ムスタングの仔馬を捕まえて、ではない。成馬、つまり大人の馬を捕まえて、調教していたという。乗馬として使う方も、仔馬よりもすぐに使える成馬を喜ぶ。



illustration by Junko Agi



馴致の方法がかなり異なるオーストラリア産馬のキンシャサノキセキだが、G12勝など、日本で大成功を収めた

だから商売としては成馬が調教できればその方がいいのだが、彼にはそれができたのだという。

おそらく、誰にでもできることではないだろう。彼にしかできないことだったのかもしれない。馬を力で押さえつけるその調教法は、息子のモンティ・ロバーツにとって反面教師ではあったのだが、やり方はどうあれ、野生馬の成馬も、人に馴らすことはできたのである。

「これらの事実が示しているのは、『馬を人に馴れさせるのは、いつでも可能』ということですよ。子どものころから始めてきたって大丈夫なんです」

一方で、例えばシマウマのような動物はどうか。

「子どものときから人間が育てると、最初はうまくいくんです。人に馴れ、言うこともきく。ところがある年齢になると

急に反抗的になって、やがてコントロールできなくなる。そういう動物は家畜化できないんです」

シマウマは駄目、それからモウコノウマも駄目。馬に近い動物であっても、家畜化できるものとできないものは、はっきりと分かれている。

シマウマは小さなときからずっと育てていても駄目、馬は成長してからも大丈夫。両者にこの違いができたのは、シマウマにはなかった柔軟性を、馬が持っていたからだと言える。

「雑草性、という言葉が適当なのか分かりませんが、環境が最適でなくても生きていける力が馬にはあったということですよ」

馬にその柔軟性があつたことを、私たち競馬ファンは感謝しなければならぬ。それがなければ、人と馬と一緒に暮らすこともなく、であれば当然、競馬も生まれることはなかったのだから。

それにしても、本来の群れで暮らす生活をしなくなった馬たちだが、そのことを不満に感じたりはしないのだろうか。家畜化できた動物だから大丈夫、ということなのか。

「動物園の動物たちには拘禁によるストレスがあると言われています。競走馬にも他馬と自由に交流できないストレスがないとは言えないでしょうが、競馬の場合、人間の存在がかなりの部分で、埋め合わせとなっていると考えられます。人との関係がストレスの解消になっているのでしょね」